

埼玉県 越谷市



自治体基礎データ

人口（2018年5月1日現在） 341,221人
 面積 60.24km²
 未就学児童数（5歳以下）と世帯数（平成30年4月1日現在）
 17,359人 一世帯
 出生数 2016年（1月～12月）：2,808人
 2017年（1月～12月）：2,708人（保健総務課）
 合計特殊出生率 2016年度：1.38 2017年度：—
 人口流出数 2016年度：転入 14,903人 転出 12,462人
 2017年度：転入 14,539人 転出 12,929人
 未就学児童の年齢別数と保育状況（2018年4月時点）
 5歳児：1号認定 248人 2号認定 967人 在宅 96人
 4歳児：1号認定 230人 2号認定 962人 在宅 82人
 3歳児：1号認定 234人 2号認定 2,686人 3号認定 0人
 在宅 283人
 2歳児：3号認定 1,071人 在宅 1,829人
 1歳児：3号認定 919人 在宅 1,968人
 0歳児：3号認定 439人 在宅 2,260人
 保育所待機児童数【保育所・認定こども園・幼稚園・地域型保育設置状況】
 （2018年4月時点）
 保育園：公立 18件、私立 25件
 認定こども園：計 6件（公立 0件、私立 6件）
 （幼保連携型 6件、幼稚園型 0件、保育所型 0件、
 地方裁量型 0件）
 地域型保育事業所 計 44件（家庭保育事業 公立 0件、私立 3件、
 小規模保育事業 計 35件 うちA型 私立 23件、うちB型地産 12件、
 うちC型 私立 0件、事業所内保育事業 私立 6件）
 幼稚園：公立 0件、私立 21件
 子ども・子育て支援関連予算額
 2016年度：19,046,139,千円

2017年度：20,261,499,千円

それぞれの施策を進めるための庁内体制について（庁内組織数、参画部署名）

参画部署名：子ども家庭部、福祉部、保健医療部

子ども・子育て支援事業について（地域子育て支援13事業及び母子保健の実績）

利用者支援事業、延長保育事業（時間外保育事業）、放課後児童クラブ（学童保育室）、子育て短期支援事業（ショートステイ）、乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）、養育支援訪問事業、地域子育て支援拠点事業、一時預かり事業、病児・病後児保育事業、ファミリー・サポート・センター事業、妊婦健康診査

子ども・子育て支援及び高齢者対策を巡る自治体の特徴

昭和40年代以降、都市化が進み、首都近郊のベッドタウンとして変貌した。平成27年4月には、県内2番目の中核市となり、現在では人口34万人を擁する、県南東部地域の中核市として発展している。

総人口及び0～5歳児の人口は微増

保育ニーズ増加傾向



越谷市役所

1. 子育て世代包括ケアに関する計画と事業内容

越谷市子ども・子育て支援事業計画（計画期間平成27～平成31）を平成29年度に見直し、「妊娠期から子育て期にわたるまでの母子保健や育児に関する様々な悩み等に円滑に対応するため、保健師等が専門的な見地から相談支援等を実施し、妊娠期から子育て期にわたるまでの切れ目のない支援体制を構築」することとし、平成31年4月「子育て世代包括支援センター」を設置した。

事業内容は、母子健康手帳交付時にすべての妊婦を対象に保健師等が面談を行い、妊娠・出産・育児に関する相談などに応じ、相談者の状況に応じては関係課へつなぐなど、妊娠期から就学前の子育て期において切れ目のないサポートを実施するもの。

2. 利用者支援事業

越谷市では、特定型の利用者支援事業と母子保健型の利用者支援事業を実施している。

母子保健型については、1の回答に記載のとおりであるが、特定型については保育所等の事務を担当している子ども育成課の窓口において、保育コンシェルジュ（保育所長経験者）が子どもの預け先等を中心に様々な子育てに関する相談に応じている。

3. 地域保健福祉をはじめとする地域づくりに対する自治体としての考え

本市では、第4次越谷市総合振興計画（2011年度～2020年度）の基本構想において、コミュニティ区域（公民館区）を基本的な単位とし、市民の参加と協働による地区からのまちづくりを進めている。

各地域（13地区）には、地区センターを設置し、生涯学習、地域コミュニティ、防災救援、地域福祉の4つの機能を有するとともに、証明書発行業務といった行政サービスをおこなうなど、地域の拠点施設という性格を有している。

特に、高齢者福祉・介護保険分野では、地域包括支援センターの設置について、13地区を日常生活圏域として定めるとともに、設置場所を医療法人や社会福祉法人等の施設から地区センター内へ移設を進めている。各地域包括支援センターは、民生委員や自治会など、地域の関係団体との連携強化に努めており、各地域の実情に応じた地域包括ケアシステムの構築を図っている。

4. 介護及び高齢者施策と子ども・子育て支援施策との連携事例の有無

高齢者施策の一環として、空き店舗を活用した高齢者の居場所を2カ所設置している。そのうち、北部地域に設置している居場所では、1歳未満児を子育て中の保護者の方と、地域の高齢者との交流の場として、「ふれあい赤ちゃん広場」を定期的で開催している。

5. 地域保健福祉に関する協議体について

ア) 協議体の有無

平成28年6月に第1層（市全域を対象）とした協議体を設置した。また、第2層（各地区）を対象とした協議体については、今年度、2地区をモデル地区に選定し、協議体の設置に向けた取り組みを始めて

いる。

イ) 協議体がある場合の体系と陣容

第1層…民生委員、老人クラブ、市社会福祉協議会、シルバー人材センター、

福祉推進員※、地域包括支援センター

※福祉推進員：市社会福祉協議会の養成研修を修了した方で、近隣の見守り活動やサロンの運営等を行う。

第2層…民生委員、福祉推進員※、市社会福祉協議会、地域包括支援センター 等

6. 地域団体・市民活動団体・企業などとの連携の状況

地域包括ケアシステムの構築の一環として、各市町村が実施する地域ケア会議について、高齢者個人の課題解決に向けた会議や市全体に関する会議のほか、各地域での会議（地区レベル）を行っており、地区レベルの会議では、地域の関係団体同士の顔の見える関係作りをはじめ、地域の情報共有などを行っている。

また、地域における高齢者の見守りをはじめ、要介護者の早期発見、早期対応を目的とした地域包括支援ネットワークを構築しており、地域包括支援センターを中心に、自治会、民生委員、介護事業所をはじめ、地区レベルの地域ケア会議の出席者を含めた、様々な団体と連携を図っており、平成29年度末時点で、37の団体にご協力いただいている。

併せて、これまで市内郵便局と個別に取り交わしていた「災害時相互協力」「道路損傷や、ごみの不法投棄に関する情報提供」に、「子どもや高齢者の見守りに関する事項」などを加えた包括連携協定として新たに整理して、平成29年度に安全で安心な地域社会の実現に向け、包括連携を行った。

7. 生活支援コーディネーター配置と人材養成についての、今後の予定

第1層…市社協（2人）、市（1人）を平成28年4月より配置

第2層…今年度から、2地区において福祉推進員の中から数名を候補者として選定し、配置する予定

回答者：福祉部 地域包括ケア推進課 関 泰輔さん

子ども家庭部 子育て支援課 小坂 麻衣子さん

子ども家庭部 子ども育成課 原田 幸哉さん

NPO 法人子育てサポーター・チャオ

団体基礎データ

所在地 埼玉県越谷市弥十郎 670-5

従業員数 30 名

事業概要

これまでの事業の歩み

事業会計報告 平成 29 年度決算

経常収益合計 13342958 円

経常支出合計 12894539 円

事業別利用者数と内訳 講座事業 年間のべ 2587 人

講師派遣 年間 140 回

保育事業 年間 380 回 のべ 607 人

イベント事業 年間 9 回

人材育成事業 年間 19 回 のべ 30 人

越谷市子育てサロン運営 年間 のべ 6000 人

事業の運営体制（スタッフ数など）

実施事業サービスと法令との関係（ex. 介護保険、子ども・子育て支援新制度事業）

1. 主たる事業

自主事業

講座事業 公民館親子講座 家庭教育学級 児童館講座 NP（ノーバディ・パーフェクト）プログラム

育休&職業復帰講座

保育事業 保育者派遣（小学校 日本語教室 図書館 他団体への保育支援）

イベント事業 協働フェスタ 子育て応援フェスタ セタフェスタ

人材育成事業 研究会、講習会への参加

情報提供事業 アンケート調査 ちゃお通信の発行 学習会などの実施 ホームページ・SNS

その他 教材などの制作 他団体との交流 広域ネットワークへの参加 審議会などへの参加

栄進中学校乳幼児ふれあい教室 こども大学こしがやまつぶし

受託事業

福祉村事業 福祉村ベビールーム（火～金 乳幼児一時預かり）

イオン事業 おはなし会（火 レイクタウンイオン 乳幼児親子 15 組 / 日）

赤ちゃん計測・相談（土 レイクタウンイオン 乳幼児親子 60 組 / 日）

ひろば事業（越谷市からの委託事業）

越谷市子育てサロン みんなのひろばフェリーチェの運営（乳幼児親子 年間 6000 人）

火・木・土 コープルーム

金 ほっと越谷（越谷市男女共同参画センター）

家庭訪問型子育て支援 ホームスタート事業（45 家庭 / 年 訪問数：300 回 / 年）

放課後子ども教室事業 なかよし教室 弥栄教室（土 各 19 回 各 30 人）

2. ここに至るまでの経緯、きっかけ

平成 7 年 越谷市男女共生のまちづくり市民会議に参加

平成 8 年 越谷市男女共生のまちづくり市民会議参加メンバーで子育てサポーター養成講座を開催。

「子育てサポーター・チャオ」を発足させる。（子育てサポーター全国第一号）

平成 9 年 子育てサロン事業を市に提案。公民館巡回「子育てサロン」開始

親子サークルの講師、親子イベント、保育を始める

平成 14 年 NPO 法人子育てサポーター・チャオとなる。事務局開設 公民館講座の企画、講師、保育が増えていく。

平成 15 年 「生きる力を育てる小学生のための土曜講座」を行う 財団法人児童育成協会こどもの城との共催で、マタニティコンサート & 赤ちゃんサロン開催

平成 16 年 「こどもの城」助成事業として＜小中学校での赤ちゃんとの交流事業＞を行い、全国フォーラムで事例発表。

＜子どものための読み聞かせ推進事業＞実施

「企業の次世代育成支援に関する調査事業」実施。育休交流会、転入者交流会始める

平成 17 年 放課後子ども教室事業「なかよし教室」受託 福祉村ベビールーム受託

「カナダに学ぶ 13 地区子育て支援研修事業」で 13 地区センターで子育て支援懇談会やノーバディズ・パーフェクトを行う。

埼玉県主催「親子げんきふれあい体験事業（一泊）」実行委員となる。

平成 18 年 放課後子ども教室事業「やさか」教室受託

チャオ 10 周年記念公演＜おはなしちんどん＞を行う

ママが活動するサークル「たんぼぼくらぶ」誕生。

子育てバリアフリーの調査研究を行い、＜おすすめ赤ちゃん連れ遊び場マップ＞作成。

子ども防犯安全カルタ、防犯戦隊マモルンジャー DVD 作成。

マタニティサークル開始

平成 19 年 埼玉県子育てコパトン応援団 特別団員に認定される

産前産後の育児サポート事業にてマタニティ対象料理講習会を開催

「フレッシュママのレシピ集」作成

安全カルタ販売開始

文部科学省受託事業＜子どもの生活リズム工場のための調査研究事業＞実施

平成 20 年 産褥・ベビーシッター開始

레이크タウンイオンでの赤ちゃん相談・読み聞かせ事業受託

企業 9 社 10 箇所でのパパセミナー開催。「男の育児は質より量」作成。

パパサークル「チャオ F」誕生。畑での野菜づくり交流が始まる

平成 21 年 仕事復帰に向けた企業とのネットワーク事業を行う

企業でペアレンティングセミナーを開催。

初めての育休仕事復帰ガイドブック「さよなら復帰ブルー」作成

平成 22 年 埼玉県青少年功労 表彰を受ける

「ホームビジター養成講座」開催。ホームスタートこしがや開始

平成 23 年 埼玉ホームスタート推進協議会ができる。

念願の子育て支援拠点受託。「越谷市子育てサロン みんなのひろばフェリーチェ」開始

さいたま教育ふれあい賞 受賞

男女共同参画・少子化に関する研究活動の支援ならびにこれに関する

顕彰事業奨励賞受賞

平成 25 年 埼玉県子育て応援事業ファミリーイベント「育ふえす」開催

平成 25 年～ 26 年 地域医療を守る共助の取り組み支援事業を委託される「すくすくりサークル」発足

平成 26 年 里親委託推進事業実行委員となり「ファミリーシップフェスタ」開催

平成 27 年 里親委託推進協働事業を委託される「ファミリーシップフェスタ」開催

平成 28 年 0 歳～ 6 歳の親子対象だったホームスタートに産前（初産妊婦）対象コースも開始

3. 関わってきた人（キーパーソンを探る）、もの、おかげ

法人化のときに、さいたま NPO センターの村田恵子さん（元 NPO 法人越谷 NPO センター）にとてもお世話になった。

ホームスタート事業に興味を持ち、手がけることを決めたのは前代表・雲雀信子さん。

当時埼玉県立大学の教授だった鈴木孝子先生を中心に、市内外の担当部局の人たちなどと子どもと家族のための地域支援研究会をおこなっていた。子育て支援は家族支援であり、個別アウトリーチが重要ということで、パイロット事業として有料のベビーシッターを始めたところ、イギリスで行われていた、より身近な地域の人がボランティアとして伴走するホームスタートを知った。無料ボランティアのビジターと有料のベビーシッターの両立については、法人内でも議論となったが、ベビーシッターはわが子を託す一方、ビジターは託されるのではなく一緒に過ごすという相違点があり、そこが有料と無料の違いと決着。ホームスタート事業は当初自主事業としておこなっていたので、助成金を活用しながらの運営に苦労したが、今まで出会うことのできなかった、支援の必要なさまざまな家族につながることで、支援の幅が格段にひろがった。

4. 運営のコツ、運営上で苦労していること

苦労しているのは人手不足。チャオは、正会員がスタッフなので、会員募集をおこなっているが、求人はおこなっていない。会員は、地域の子どもたちのために何かしたいという想いのある人たち。チャオの活動は、仕事をもちながらでも、地域貢献したいというボランティアな気持ちのある人に向いているので、会員数はあまり増えていない。ホームスタートのビジター養成講座の参加者は、ここ数年 4～5 名だが、昨年はビジターとして認定された方が、全員チャオの会員にもなってくれた。誰もがフルタイムの仕事を得るようになると、いずれ地域を支える人がいなくなるのでは、と不安。

5. 地域における連携体制とその実情

始まりは市の男女共生のまちづくり市民会議だったことから、初めから越谷市とのつながりはあった。事業提案などで担当部署や機関とのつながりがひろがり、教育委員会、生涯学習センター、図書館、保健所、児童相談所、社会福祉協議会、さらには小中学校、大学や研究機関、他団体や企業へとつながりは広がる一方。越谷市のみならず埼玉県ともつながっている。一時期は、省庁とのつながりもあった。気がかりな親子のフォローアップも、母子保健部署との連携によりス

ムーズになった。生活困窮者の就労につながる、緩やかな社会復帰プログラムの一環にも携わるようになった。思いがけないところから声がかかり、子ども・子育て支援として行っている活動も、視点を変えれば、さまざまな分野で役立つ可能性があると感じている。子育て世代地域包括ケアを本当の意味で充実させるためには、孤立した親子が地域のコミュニティにつながるきっかけになるようなつなぎ役となる活動が必要で、NPOなどの民間団体がその地域連携を担うのには、ホームスタートはとりかかりやすい事業。

6. 行政からの業務委託の有無

越谷市子育てサロンみんなのひろばフェリーチェの運営

地域子育て支援拠点事業のアウトリーチ事業として、ホームスタートにも事業予算が充てられるようになった。

越谷市放課後子ども教室

回答者：代表理事 近澤恵美子さん

ヒアリングを終えて

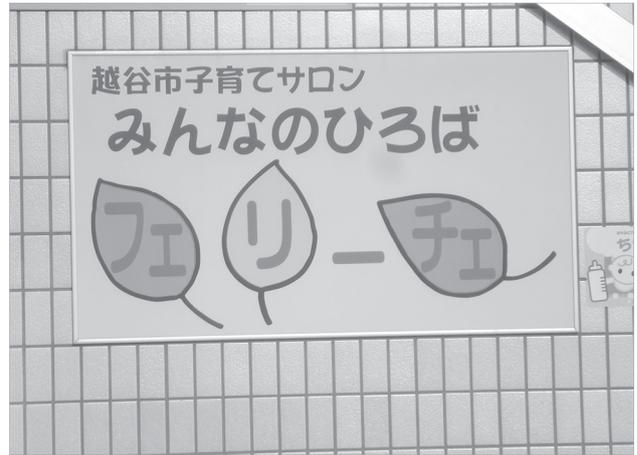
「子育てサポーター」という言葉を世に出した団体であり、生涯学習形の講座を多く手がける傍らで、育児休業明けの職場復帰支援やペアレンティングの重要性にいち早く気づき、企業に働きかけるなど、子ども・子育て分野でのパイオニア的活動を行ってきたことは、知る人ぞ知る存在である。

NPO 法人子育てサポーター・チャオ初代表理事の雲雀信子さんは、にっぽん子育て応援団設立当初から 2 年近く事務局として、立ち上げ期の活動を牽引していた。助成金申請の企画書作成が上手で、しかも助成金を徹底的に効果的に使い切る。子ども・子育て分野への助成を行うある財団では、その手腕はつとに知られていて、にっぽん子育て応援団立ち上げ期にも、彼女の手腕は存分に発揮された。もちろん、NPO 法人子育てサポーター・チャオでも同様で、現代表理事の近澤さんは、雲雀さんの活躍ぶりを懐かしく振り返りながら、これまでの経緯を話してくれた。

多くの市民団体がなかなか活動拠点を持つことができず、スタッフの自宅を事務局として使ったり、巡回型の活動を行うなど、苦労している。チャオも同様で、子育てサロン事業を行政に提案したものの、公民館の巡回型でしか実現しなかった。それが、子ども・子育て支援新制度によって地域子育て支援拠点事業として法律的裏づけができたことで、チャオ念願の固定した場所での子育てサロン運営を受託した。生協の拠点の 1 室を格安で借り、週 3 回開催で、15 組も入れれば「満員御礼」となる狭さ。それでも年間 6000 人が訪れるという。他団体運営の自主サロンや、支援センターの中には参加者がそれほどいないところもあるらしい。何が違うのか「私たちはこの場を訪れる人と人をつなぐことも役割と考え、場作りを行ってきた」と、近澤さんが違いを説明してくれた。親子を温かく迎え入れ、親子同士がその場でくつろぎながら会話も弾めるよう、それとなく促していく。単なる場の提供ではないスタッフの動きは、あまりに自然で、はたから見れば、何もしていないようにも見える。よく「見守っています」と施設の職員が話しているが、ただ見ているだけでは、地域子育て支援拠点の本当の役割は果たせない。人と人をつなぎ、必要に応じて専門機関へもつなぐのが拠点スタッフの本当の役割。だからこそ、利用者支援事業「基本型」は地域子育て支援拠点で行うとされている。参加者数に

差があるのも、この辺りに秘密がありそうだ。

ホームスタート事業を始めたことで、地域のさまざまな機関や人とつながりだけでなく、地域のつながりや全国にひろがるホームスタート事業の仲間とのつながりもできた。さらに、生活困窮者の社会復帰プログラムの一環として、チャオの事業のひとつを利用したいというオファーがくるなど、思いがけないつながりというか、活動の果たせる役割が見えてきているという。「これが新しい事業のひとつになると思います」と近澤さん。新たな分野の開拓は、どうやらこの団体の担うべきミッションのひとつらしい。



フェリーチェの看板



みんなのひろばフェリーチェが入る生協のビル



フェリーチェ



フェリーチェ入り口



フェリーチェは赤ちゃんの駅にもなっている



フェリーチェでくつろぐ親子